

教 育 研 究

《 研究主題 》

一人一人が自ら学ぼうとする姿を目指して ～ 学習の「動機」や「振り返り」に焦点を当てて ～（1年次）

I 主題設定の趣旨

1 研究主題の設定に当たって

（1）前研究の成果から

本校では、平成24年度から平成26年度までの3年間、研究主題を「よりよい人間関係を育む授業の在り方」と設定し、人間関係にかかわる実践的な研究が行われた。3か年の研究を通して、現在の教育課程で行っている授業を人間関係の視点で分析し、情報を収集・整理することで、人間関係の指導内容を「人間関係指導内容整理図」や「人間関係指導内容段階表」としてまとめることができた。広範囲にわたる人間関係の中から2・3年次にはそれぞれ「集団参加、協力・共同」「意思表示」に指導内容を絞り、それぞれに対して適切な指導内容の設定や効果的な指導方法の工夫を行うことができた。こうした実践を重ねる中で、児童生徒の行動の背景には、学習の「動機」が大きく関係していることを実感した。また、他者からの称賛などによる行動の「振り返り」が新たな動機や理解・気付きの育ちへとつながっていることが明らかになった。この「動機」や「振り返り」に焦点を当て、児童生徒の意欲や主体性を高める内容・方法を工夫改善することにより、児童生徒が自分らしさを発揮する中で可能性を広げ、伸ばしていくことができるのではないかと考え、本主題を設定した。

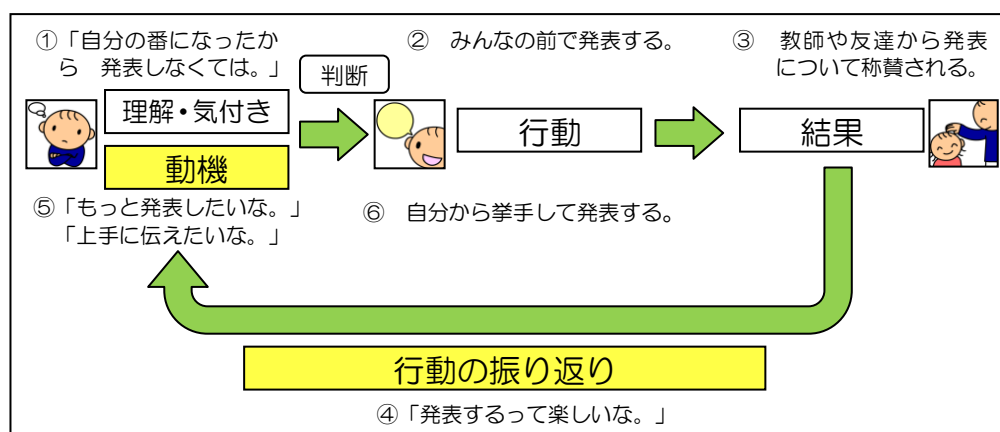


図1 「行動」と「行動の背景のサイクル」

（2）児童生徒を支援する教職員の研究に関するニーズから

教職員を対象に行った平成26年度研究のまとめのアンケート調査では、児童生徒一人一人の行動の背景である内面を考えていくことの大切さを実感したという意見が多数挙げられたが、一方で日々の実践において、それらをどのように見取っていけば良いかが難しいという意見も多く挙げられた。児童生徒一人一人が活動にどのような意味を感じ、どのような動機で取り組んでいるのか、そしてどのように自らの行動を振り返っているのかなど、一人一人の内面や行動の背景

を多様な視点で深く見取っていきたいという研究ニーズが多く寄せられた。

(3) 研究を通して育てたい児童生徒の力

前述したように、前研究の成果や課題、教職員の研究に関するニーズから、本研究で「動機」や「振り返り」などの児童生徒の内面に焦点を当てて研究を行っていく方向性を定めた。そこで、「動機」や「振り返り」に焦点を当てて研究を行っていくことで児童生徒に身に付く力や育つ姿はどのようなものなのか、教職員で共通理解を以下のように図った。

- ・ 児童生徒が学習や活動に対して自ら学ぼうとする姿。
- ・ 自ら自分を高めようとする姿。
- ・ 様々なことに「もっとやってみよう」という姿。
- ・ 内面が成長することで、環境やかかわる人が変わっても自分から行動し、挑戦することができ、自分自身で成長しようとする姿。
- ・ 児童生徒の活動の原動力・やる気となる力。

(4) 本校の児童生徒の姿から

教育目標（目指す人間像）		
○ 自分を高めようと努力する人 ○ 他人をだいにしようとする努力する人 ○ 社会につくそうと努力する人		
小学部の目標	中学部の目標	高等部の目標
○ 身のまわりのことは自分でしよう ○ みんなと仲良くしよう ○ 自分で選んだ活動に精いっぱい取り組もう	○ 自分で考え、取り組もう ○ 思いやりをもって生活しよう ○ 自分の役割を進んで果たそう	○ 自分で考え自信をもって生活しよう ○ 互いに助け合って生活しよう ○ 社会の一員として責任を持って生活しよう

本校の教育目標や学部目標には、本研究の主題にもある「自ら学ぼうとする姿」にかかわる項目が示されている（太字参照）。これまで、本校において上記の教育目標の達成を目指し、児童生徒と日々かかわり、教育活動を実践してきた。昨年度の教育課程の反省では、「授業や日常生活の中で、児童生徒が自分で考えるための発問を心掛けてかかわることができた。」「教師が指示を出さなくても、友達に対して自然に手伝いに動く姿が増えてきた。」というような児童生徒の自ら学ぼうとする姿が複数挙げられた。一方、「人間関係の研究を行ったことで、児童生徒同士のやりとりの場面は増えたが、形式的なやりとりになりやすい。」「児童生徒が状況を理解して、自分で考え、判断して行動する力を付けさせたい。」という意見も多く出された。そうした姿を具現化するためにも今までの研究で培ってきたノウハウを生かしたり、各学部の系統性を明確にしたりすることにより、児童生徒のよさや可能性を見取り、伸ばしていきたいという思いで一致した。

以上のことから、本校において、様々な状況の中でも、自ら考え、判断して行動することのできる「自ら学ぼうとする姿」が実現できれば、児童生徒の良さや可能性をさらに引き出し、自信を持って活動できるようになると考える。そのためには、児童生徒の内面を見取り、価値付け、広め、次の学習の動機を高めていける方法を実践を通して明らかにしていくことが必要と考える。

(5) 社会の情勢から

① 特別支援教育にかかわる動向

近年、障がいのある人々を取り巻く環境や障がいについての考え方に大きな変化が見られてきている。平成13年WHO総会で国際生活機能分類（ICF）が採択され、障がいの概念が根本的に変化した。これまで障がいにより生ずる社会的不利は本人に障がいや疾病があることが原因で発生するという一方向であった。しかし、ICFの考えでは、「〇〇があれば〇

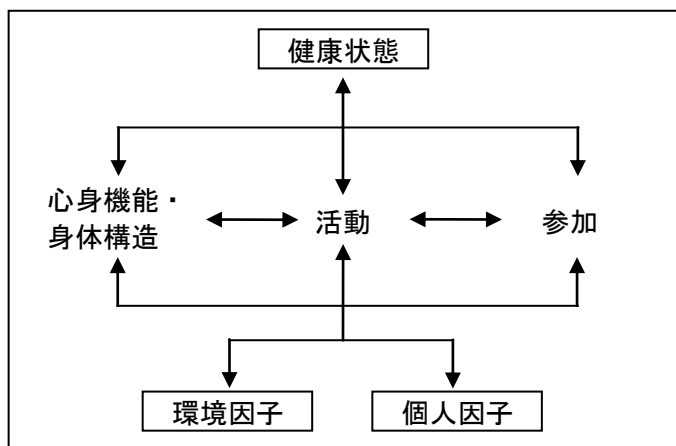


図2 ICFの概念図

〇ができる。」と言ったように、本人を取り巻く支援の在り方によって本人の活動や参加の状態が変容し得るという考え方が示された。また、平成18年国連が「障害者の権利に関する条約」を採択し、平成26年に日本も条約を批准したことで国内の特別支援教育におけるインクルーシブ教育システムの構築が進められることとなった。インクルーシブ教育は、「人間の多様性の尊重等の強化、障害者が精神的及び身体的な能力等を可能な最大限度まで発達させ、自由な社会に効果的に参加することを可能とする」ことを目的としている。そのための手段の一つとして、障がいのある人が日常生活や社会生活を送る上で妨げとなる社会的障壁を取り除くための合理的配慮（例えば、生活能力や職業能力を育むための生活訓練室や日常生活用具、作業室等の確保、漢字の読みなどに対する補完的な対応）が挙げられる。これらのように、障がいのある人々の環境は刻々と変化してきており、障がいのある人もない人も、誰しもが相互に人格や個性を尊重し支え合える、共生社会の実現が求められているといえよう。

このように、現在の社会の情勢は、障がいのある人を取り巻く周囲の環境を整備し、主体的な活動を可能にしていこうとするものである。しかし、障がいのある人が障がいのない人と共に生活し、刻々と変化する社会を生きていくためには、自ら状況を判断し、時に必要な支援を要請するなどの周囲の環境に自ら働き掛け生活しようとする力も必要である。でなければ、受動的な活動になりがちになってしまい、障がいのない人との本当の意味での共生の実現は困難となる。よって、共生社会実現のためにインクルーシブ教育システムの構築は必要であるが、それと同時にかわり手である教師が、障がいのある人自身の内面を見取り、周囲の様々な環境の中で自ら学ぼうとする姿の実現を図っていくことで、誰もが社会の一員として役割を果たしていくことができると考える。

② 特別支援学校に在籍する児童生徒の障がいの状況

一方、最近の特別支援学校においては、障がいの重度・重複化、多様化が進んでおり、こうした多様な障がいに対してきめ細かな教育を行うことが求められている。平成21年に告示された特別支援学校学習指導要領で、知的障がいのある児童生徒の学習上の特性として、「学習によって得た知識や技能が断片的になりやすく、実際の生活の場で応用されにくいことや、成

功経験が少ないことにより、主体的に活動に取り組む意欲が十分に育っていない」と挙げられている。ただ、「(4) 本校の児童生徒の姿から」でも記したように、本校の児童生徒に対しても、学習で学んだことを、他の活動場面や実生活で上手く生かすことができない現状である。そのため、多種多様な障がいの実態を捉え、児童生徒の内面を理解し、様々な学習活動に自ら学ぼうとする姿を具現化するための研究を行っていくことは、児童生徒の良さや可能性を引き出し、自信を持たせることに繋がると考える。

以上のことから、本研究で、児童生徒の学習の動機や振り返りなどの内面を理解しつつ、一人一人が自ら学ぼうとする姿を具現できるようにアプローチしていくことは、特別支援教育の動向や児童生徒の障がいの状況から見ても今日的な方向性であると言えるだろう。

II 研究の計画

1 研究目的

児童生徒の内面を探り、授業づくりの仕方や指導・支援方法を明かし、児童生徒一人一人が自ら学ぼうとする姿の実現を図る。

2 研究テーマ

一人一人が自ら学ぼうとする姿を目指して
～学習の「動機」や「振り返り」に焦点を当てて～（1年次）

3 研究仮説

日々の授業において、児童生徒一人一人の学習の動機や振り返りの内容・方法などを工夫・充実し、児童生徒の内面の変容を探りながら評価・改善していくことにより、一人一人が自ら学ぼうとする姿を実現することができるだろう。

4 研究内容

(1) 「動機」にかかわる実践の視点

- ・ 自分からやってみたいと思う動機
- ・ 目的意識をもって活動に取り組むことのできる動機
- ・ 動機を維持するための手立て など

(2) 「振り返り」にかかわる実践の視点

- ・ 児童生徒の行動の見取りや価値づけ
- ・ 自己評価を促す工夫・充実
- ・ 動機を持つ／高めることのできる振り返りの仕方 など

5 研究方法

- (1) 児童生徒一人一人が自ら学ぼうとする姿とはどのような姿なのか協議し、動機や振り返りについて共通理解を図る。
- (2) 日々の授業において、児童生徒一人一人の学習の動機や振り返りの仕方・程度を洗い出す。
- (3) 学習の動機や振り返りの種類、方法等を文献や資料を基に整理し、指導・支援方法を明らかにする。
- (4) 実践を通して、児童生徒一人一人の内面の変容を捉えながら日々の授業を評価・改善する。
 - ※ 年間を通して、研究で明らかになった指導・支援方法などを個別の指導計画に生かす。
 - ※ 福島大学や関連機関との連携を図り、専門的・客観的な視点から助言を得る。

6 研究計画（3年計画）

1年	<ul style="list-style-type: none">・ 目指す姿の共通理解。・ 実際の授業の中で学習の動機や振り返りについてどのように行われているのか洗い出す。・ 文献や資料を基に学習の動機や振り返りの種類、方法等を知る。
2年	<ul style="list-style-type: none">・ 把握した学習の動機や振り返り、自ら学ぼうとするために必要な授業づくりの要素を整理し、実践に活用する。 例えば、動機の種類や程度、振り返りの仕方を把握するための確認表
3年	<ul style="list-style-type: none">・ 2年目に整理し、形にしたものを授業で活用し、有効性を検証する。 例えば、2年次に作成した上記の確認表を使って先生方が日々の授業に生かしていく。
年間	<ul style="list-style-type: none">・ 研究を通して明らかになった指導・支援方法などを個別の指導計画に生かす。